

# ケース記録

四年 若松信子

児童名……T・I(女)満十七才

昭和十一年六月六日生

住所……S県N市O駅下車

通告者……K警察署

種別……家出浮浪児

## 一、取扱つた理由

昭和二年五月一日、O駅一時保護所より中央に電話があり、難問のケースがあるから来る様にとの事。午後実習生Aと共に出かけた。

指導者B先生曰く——一七、八才の女の子で家出浮浪らしいが住所家族一切不明で、おそらく名前も偽名と思われ、見た感

じ相當な代物故わかる醜態で聞いてみてほしい。先ず二人で会つてごらんさい——との事で、二人で隣室の食堂へ行く。

## 二、面接経過

本人T子は部屋の一隅に立つて窓から外を眺めていた。部屋の入口でその姿を見た私は、これは、と思ひ少し躊躇し、中に入らず又元の指導者の部屋にもどつた。長い不潔な髪の毛、うす汚れた半袖のセーターを直かに身につけ、セーターから出ている真黒な腕は両方とも第二関節の内側にオデキの様な物が出来ている。

「相當な代物故わかる醜態で聞いてみてほしい。先ず二人で会つてごらんさい——」を感じたが、又氣を落ち着けて二人で出かけていつた。

「お待ちどうさま、明かるい所に座りましょう。ここがいいネ」

等と二人で声をかけながら入つて行くといきなり、

「帰りたいたいだから早く出しておくれよ——と。」

「その前に少しお話ししましょう。先ずそこを直かに身につけ、セーターから出ている真黒な腕は両方とも第二関節の内側にオデキの様な物が出来ている。」

と云いながら、細長い机をささんで本人の前に二人並んですわつた。

初めの中はAが話をはじめ、私は黙つて

相手の様子を見ていた。

「名前は何て云うの。」

「名前？ さつき警察で云つたよ。……T・Sつて云うのさ。」

といかにも勿体振つた物の云ひ方、

「じゃ、お父さんやお母さんは？」

「あたにはお父さんもお母さんもないよ、それより早く帰らしてくれよ」

又も解放される事を要求する。之に対し

Aは、

「帰してあげたくても何もわからなければだめでしょう。ほんとうの事を云わなければだめよ」

「そんな事いろいろ聞いてどうするんだら。どうせほんとうの事なんて云いやしなさい」

「それじゃ、あてもなく帰らせてあげられないもの、ほんとうの事を云わなくては」とAはなだめる様に云う。

丸顔の浅黒いT子は時折異様な目つきでAの方を見てゐる。しきりに手の出来物を掻き、胸から手を入れてはあちこちを掻いている。大きな目と左顎下に小豆大のホシロー——魅力的なかわいらしい顔をしてゐる。体格はいかにも健康そうで豊かな胸を

持ち発育満点と云つたところ。

その中に本人は急に今まであちこち掻いていた手を止め、Aに向かつて、

「ちよつとそれ見せて、いつ時計持つてるネ」

と云いながらAの左手を掴んだ。Aは中半声を出しながら、とつぎに手をひつこめた。

それ以後二人が何を聞いても答えずAの蘭京虫時計の方をちらつちらつと見て、すわたり子供の様に黙つてゐる。

これではもう駄目だと思ひ、今度は私一人で面接してみたらと考え、Aには、少しの間座をはずしてもらつた。

今までは場所を変え、今度は一緒に並んで腰をかけた。

「いい体格をしているネ、半分わけもらたい位だワ、いつたわいくつ？」

「あたいの？ 一七才の親無じさ」

「それじゃ、お父さんお母さんは何時頃なかつたの？」

「お父さん？ さあ知らない。あたいが物心ついた時はもういなかつたさ」

と私の質問を心ず反復してから答える。次に生年月日を聞くと、「昭和十一年六月六日」とすらすらと答える。そこで私は再び

名前を聞いてみた。

「名前は何て云つたかしら？ 何T子だつた？」

「さつき云つたらう」

と云う返事。更に知らん顔をして、

「ほらさ、Sつて」

時々独特な目つきで人を見てゐる。相変らず出夾物を掻きながら。この「S」と云う言ひ方が何とも云えずきこえない。これはうそだなと思つたが一応書きとつた。

「その生年月日と名前をよく知つてゐるのネ、お母さん達を全然覚えてゐないのに」

「みんながそんな風に云つていたから、そうなんだろ」

「みんなつて誰？」

「あたいの友達さ」

「友達が沢山ゐるらしいネ、小学校は何処に行つたの？」

「学校へなんか行かないよ。それより早く帰りたいんだ」

と話の中に、又帰る事を要求する。そこで、「さつきから帰る帰るつて、わつたわ何処

「帰るの？」

「S県さ」

「それじゃS県から上京して来たの？」

「違ふよ、東京に居たんだ」

「東京の何処にいたの？」

「あちこち転々としていたのさ。早くS県に帰りたんだが帰らせてくれないんだ」

「誰が？」

「誰つて若い衆がよ。あんたお金持つていら？」

「何するの。……そんなに汚れた手で搔いたらオデキが余計ひどくなるわよ。どら見せてごらん」

しきりに搔いていた手を持って出来物の所を見てやつた。他にも出来ているかどうかを聞いたところ、手だけだと云う。

何分間かの会話の中に、静かに話をする霧用気が出て来た。一番最初の失敗した面笑から一時間位たつたろうか。指導者のB先生が心配して応援に來られた。タバコを喫い、椅子にすわりながら、

「あんたいくつだい？」

とお聞きになつた。本人は鼻であしらつた様な笑い方をして、

「あたしかい、あたしは三十才の未亡人だ」

「家は何処なの？」

「そんなものないね。あんたそのタバコおくれよ、持つてんだらう」

といきなり手を出す。そで私は、

「ことはタバコを喫つてはいけないのよ。先生は忘れちやつたんでしよう」

と云うと、先生は「そうだつたネ」と、云いながらタバコをお消しになる。本人は側で「ふん」と云いながらそれを見ていた。

それからB先生は本人と四〜五回問答をかわしておられたが、今迄私と面笑していた時とは全く異つた本人の態度に、私は目を見張つて眺めていた。時々妙な目つきと笑いをしながらも、静かな、子供つぽい会話だつた霧用気は一変し、強い反撥的なすれた物の云い方をはじめた。その中、本人は水が飲みたいと云い出した。

そこで、食堂の一隅にある手洗い場所に、ゴップと一緒に手を洗う様に石けんを与え、私のハンカチーフを貸してやつた。保護所の大きな女の子が来て髪をとかしてやつている。

その間B先生は私に「そう云われれば三

十才位かも知れない」とおつしやる。そこで私はそれに反論して、

「そうでしょうか、女の人は普通一人で暮らしていても三十才にもなれば肌が衰え、体の線もくずれくるものですが……。ましてどんな生活をしていたか大体想像出来る様なあの人達ですから、きつとあんなものではないと思ふんですが。あの胸の張り具合やきれいな線と、色こそ黒いがしまつた肉づきや顔の肌具合では、私は二十才前だと思ひますが」

と、B先生は「そうですかネ」とわかつた様なわからない様な返事をしておられた。それから、最初の中は私をなめてかかつたりしたが、先生に対する様な捨ぜりふや、すてばち的な態度はとらなかつた事を述べ、異性に対しては強度の反感を抱いており、又すれていそうだから、も少し私と二人だけで話をさせてもらいたい旨をお願いした。住所と氏名だけでも、ほんとうの事を聞いてみたいと思ひ、少々軍荷かとも思つたがお願ひしてみた。

B先生は本人T子に向かつて、この女の先生はとても親切だから何でも話をして相談に乗つてもらはう様云つて出ていかれた。

手を洗い、髪をとかしたT子は私の前にすわり、B先生が消したまま置いていかけたタバコを取り上げ、マツチを要求した。私が相手にならないのを感じると、側を通りかかった男の子に、持つて来る様云いつける。残つていたタバコを喫い終る迄、私はそれ以上とがめもせず黙つて見ていた。「いけないつて云うのにタバコなんか喫つてごめんよ」と云いながら満足そうに煙をはき出してゐる。

「さあもういいでしょ。何でも話をしてごらん。どんな事でも聞いてあげよう。S県で誰か待つてゐるの」

「まだ来てゐないかも知れないけどさ、五月つて約束したからさ」

そこで私は、今までの言葉の端から相手はアメリカ人だろうと推測して、何時頃本國に帰つたかを尋ねて見た。すると本人はちよつと意外な表情をしていたが、今まで何かと虚勢を張つていたT子も、態度がやや柔らぎ、私の持つていた万年筆を書きよさそうだとほめて、借りたいと云い出した。私も内心では、梅毒の症状だろうと思われぬ出来物をしきりに搔いてゐた手に渡すのは「いやだな」と思つたが、事もなげにす

ぐ貸してやつた。

「貸してあげるから、ここにあなたの名前と住所を書いてごらん」

と万年筆と紙とを与えた。赤い万年筆を借りる事が出来てうれしのか、しばらく万年筆をもてあそび、紙に何やら書いていたが、

「今度ほんとうの事を云うネ、その代り絶対に他の人に云わないでよ」

と云いながら、T・Sは偽名であり、本名はT・Iである事、家族もゐる事等をボツボツ話し出した。そこで私は、あせらずに本人と呼吸を合わせながら、面接のやり直しの様な事柄から聞いて行つた。

「お父さんはゐるけれど、お母さんはほんとうにゐないんだよ。あたしが八つの時死んで、今は二度目のお母さんがゐるけれど……。家族はあたしを合わせて全部で七人ゐるんだ」

実父（四二才）、継母（三三才）、実姉（一八才）、実弟（一〇才と九才）、義妹（三才）の六人家族が、N市O駅下車のアパート住宅にゐるが、最近の家庭の事情、住所等は余り知らなげ子。その理由は、三年前より家を出てからは余り家に寄りつかないか

らとの事。

「どうして家を出たの。継母と感情的に氣まずい事でもあつたの」

「ううん、別にそんな事感じた事はないよ。とてもいいお母さんだもの。あたしだけだよ、こんな生活をしてゐるのは」

「こんな生活つて、家を出てから今迄何をしてゐたの」

「アメリカ人と一緒にあちこちの部屋を借りて転々としてゐたのさ」

そのアメリカ人と何処で知りあつたかを尋ねてみると、S県S郡T村T、キャバレーN（N夫妻経営）で知り合い、あちこちとさまよひ歩いてゐたと云う。そのキャバレーの住所の字がわからなかつたので、書く様に万年筆を与えたが、正確な字を知らず、余り字も書けないし又読めない様子。その米兵Jは二八年十一月一日に、本年五月に再び帰つて来る事を約束して本國に帰つたと云う。

「でもネ、あたしも馬鹿だつたんだ。つまらない事で喧嘩しちやつたから、もしかすると帰つて来ないかも知れない」と急に云ひ出したので、その内容を聞かしてあげたところ、

「別れる時に、あたしは襟帯ラジオがほしいかっただけけれど、どうしてもくれないんで、しやくにさわつたから貰つた南豆虫の時計とJのコートを買つちやつたんだ。そのお金がキャバレーNに預けてあるから、それを取り寄せてほしいんだけど……」

もしかするともう帰つてゐるかも知れないから会いに行きたいんだけど、こんな恰好では会えないから。」

と何か落ち着かない様子だつた。そこで私はJが帰つてからの生活を聞いてみた。

「Jが帰つてからそのキャバレーに住み込みで働いていたんだけど、一カ月前に、男の人が東京に連れていつてやるつて云つたので、主人のNに内証で前掛だけはずして一緒について来たの」

上京して来てからは特飲街をさまよひ、乞食生活等をして浮浪の生活を送つて今日に至つたらしいが、この辺になると、どうも話があやしくなる。

「東京では何をしていたの」

「うん？ ずい分あちこちと歩いたよ。浮浪者の様な生活で乞食もしたよ。何処へ行つても若い衆がとりまいて、あたしを離してくれないんだもの」

早くN市へ帰りたいが、身なりも乞食の様だし、先だつものはお金だから、上述のキャバレーに、お金(計七五〇〇円)と一緒に外国製トランプ、マフラー、爪切り、ヘアブラシ、齒磨き粉を送る様連絡してほしいとの事。

はじめに本人と面接してからちようど三時間かかつたが、途中種々と苦勞し、神羅を使いながらも、やつと、これだけの概要を掴み得たので、すつかり疲れてしまひ―供述に不審な点もあり、まだ多くの問題を残してゐるが―

「長い時間だつたので疲れたでしよう。少し休みましょう」

「ほんとうにずい分手をやかさせたネ。ごめんネ、こんなわからずやははじめてでしよう」

と云つて、迷惑をかけた事をしきりにあやまる。最初のあの虚勢と、鼻であしう様な笑ひ方はすつかり消え、態度も柔らぎ、顔も明かるさを増して来た。

ここで少し待つてゐる様に云つてから、私は隣室のB先生の所へ行つた。

B先生に概要を述べ、何故上京し、東京

で如何なる生活をしていたかは、まだはつきりせず、時間的な事もまだ疑問の余地がある事等を報告した。そして本人供述の家族の所在地O駅と、キャバレーNの住所地名が、果してあるか否かを地図と地名簿で探がし、事実ある事を確認した。

大部体も汚れており、お風呂に入れたいが、どうもあの手の出来物が氣になるから、血液検査をしてからの方がよいと思ふ事、その代り、あの長い髪がわずらわしいから短くしてやつてほしい事等をお願いして、再び本人のゐる所へもどつた。

T子は、先程私と面接したと同じ場所にあつており、再び私が側へ行くと、長い間目の前にこんなきたないのがいて目障りだつたらう、と云つて自分の身なりを気にし、不潔な事を詫びる程素直な態度になつてゐる。これが同一人物かと、ちよつと意外に思う程の変わり様だ。

「まだもう少し聞きたい事があるけれど、今日は疲れたから、又明日にでもしましう」

「今日中がいつから今夜話すよ」

「でも今日は私は帰らなくてはいけなから明日又来るワ」

「先生はどこに泊っているんじゃないの。何処迄帰るの？」

「遠いのよ。電車を乗りかえたりして、これから二時間かかるのよ」

「そんな遠い所から又明日わざわざ私のために出て来るの。悪いネ。今話をするといへんだけれど疲れちゃつたから。ごめんネ」

と、こんな会話をする事、出来る様な雰囲気になつた。そして、今後父の許しを得て、身の始末をしてもらいたいから、誰か先生と一緒に家に行き、父親に謝つてほしい——とそれをとても気にし、善処を望んでいた。

この本人の気持をB先生に十分伝えておく事を約束し、更に、「キヤバレーには葉書を出して連絡してあげるから、返事が来るまではここにお世話になつていらつしやいネ。折角連絡出来ても、御本人のあなたがいなければ何もならないから、皆とここで生活している約束をしましょう」

と、B先生と打ち合わせておいた事を伝えてから、髪を耳下まで短く切つていたのだ。日本髪に合いそうな黒々とした髪の毛

——私だつたら切らな気がなあ——なんて思ひながら側で見ていた。

短くしたらますます子供っぽくなり、かわいくなつた。

### 三、措置

B先生と御相談の結果、管轄がS県N児童相談所になるため、相談所あてに問題内容の概要書類を送り、調査を依頼した。

(所用時間——延三時間余)

### 感想

児童相談所へ実習に行き、全部で一ヶ一ヶ取扱つたが、その大半が家出児のため、各警察から通告された子供達の住所氏名と問題の概要を掴むための唯一度の面接しか行わない。それらの子供達を判明した住所に基づき担当の相談所へ送還する。もうそれでそのケースは私にとつては終了。一度面接した児童が、その後の様な経過を辿り、如何に解決されたかは、全く無関係に終つてしまつた。児童相談所の機能から、この様な措置は当然の事かも知れないが、私にとつては何か割り切れないものがある。家庭からの教育相談でもあれば別だ

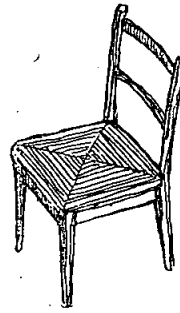
が、ここでは眞の意味のケースワークは実習出来なかつた。

この様な実習機関にあつて、前述のケースは一番手をやかされた児童だつた。まして、実習をはじめから二回目のケースだつたので、慣れない私には、余計その様な印象を受けたのかも知れないが……。問題そのものよりも面接方法に苦勞し、三時間余の長時を費した結果、遂に前述の概要を掴み得、一応成功した本ケースの記録を書いてみた。

指導者のB先生からは、先生と実習生Aとが失敗したあの手強い本人から、よくこだけだけの事を掴んだとおほめの言葉を聞いたのだが、確かに私にとつては重荷の相手だつた。

一見して浮浪児とわかる、しかも相当すさんだ生活と経歴をしていそうな、私よりも体格のよい相手が、しきりに煙草をほしがり、捨てぜりふを云い、人を馬鹿にした様な笑い方で人をあしらう。時々、彼女達獨特の目つきで人を見つめ、聞く事柄はその都度異なる。(一七才の親無し↓三十才の未亡人↓偽名↓住所不定……等)この児童を相手に、あせらず、気長に時間を置いては何

度も同じ事を聞いたり、相手と同じ様な言葉を使ったり、おだてたり、きたない出来物や嫌だなあと思いつても見てもやつたり……している中に、すてばち的態度をとり、虚勢を張つていた相手も、しだいに態度が柔らぎ、最後には、自分の今までの態



## ケース記録

現場実習より

四年

竹内敦子

### 第一回面接

児童名 O・K 昭16・3・1生

13才

本籍 C県X郡

現住所 K市X町

学歴 XX中学二年在

保護者 O・W 続柄実父

通告者 Y警察署

主訴 昭二九・三・一二日午後九時

XX区XX町に於て婦人の提鞆から現金

一三〇円窃取。

度を詫げる様になつた。ここまで来た時には、ほつとしたのか全く疲れてしまい、私自身がつかりした。が、一応は概要を掴み、やや童心にもどりはじめたものの、再び同じ道に進んでしまふのではないかと、少々心配でもある。

N児童相談所に送還されたが、本人が最後に望んでいた父親の許しを得たい」と云う事を、家庭の受け入れ態勢と共に、本人の今後の指導をしてあげなければ、現社会に於ける数多い現象だけに、困難な問題だと思ふ。

昭二九・七・二七日午後七時頃同所にて婦人の所持せるハンドバックより現金九八〇円在中の財布をすり取つたものである。

右の簡単なケースレコードに目を通し、本人に逢つた。サルの様な感じでシワの多い顔つき、精気のないこの少年は、ねずみ色の中学制服を着ていたが、上衣の袖口や胸が垢でひどく汚れている。私が驚いたのは「これが中学二年だろうか」と思う位全体が小柄で、一見、小学校五年生位である。私と向きあつて座らせると椅子から足をぶ

らぶらさせながらおとなしい表情である。ケースレコードを手に私は、本籍、名前を聞き出した。こちらの質問に対してすらすらと答え、しかもそれが要領を得て簡潔なのに驚いた。この相談所へ来る迄に何度もくり返しこれらの質問に答えて来たにちがいないと思つた位である。

家出少年に記入させる調査書を出して渡すと、手にとつて少し眺めていたが、たどたどしい文字で一字一字に力を入れて書き出した。途中で一度初めから眺めなおし、